

ばんけい

教育ほつとにゅーす
かわら版こ みち
教育の小径

4月号

2012
APRIL
No.42今月の
こぼし

千里の道も一歩より始まる

千里もある遠い旅路は、足もとの一歩から始まるという意味です。大きな事業なども身近なところからまず一歩を踏み出すことを奨励しています。「千里の行も足下^{あしもと}に始まる」とも言います。今月の
記念日

昭和の日(4月29日)

国民の祝日です。昭和64年(1989年)1月7日に昭和天皇が崩御されるまで「天皇誕生日」でした。平成元年から「みどりの日」に改められ、平成19年から「昭和の日」になりました。「みどりの日」は5月4日に移行しました。



国士舘大学教授
北 俊夫先生

今月の
テーマ

新教育課程 - 2年目を迎えて

- 新学習指導要領が完全実施されて、2年目が始まりました。昨年度の取り組みを振り返り、自校における本年度の課題を明確にしましょう。
- 子どもの学力向上はもちろんのこと、言語活動の充実、「総合的な学習の時間」の活性化、防災教育の見なおしなどさまざまな課題があります。

自校の課題を明確にしよう

小学校では、この4月から新教育課程(新学習指導要領にもとづく教育活動)が完全実施されて、2年目を迎えます。ちなみに中学校では本年度から完全実施されます。

昨年度から完全実施されている学習指導要領は、「生きる力」をはぐくむという基本理念を継承しつつ、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学習意欲の向上と学習習慣の確立、豊かな心や健やかな体の育成などを基本方針として改訂されました。

改訂の具体的なポイントは、教科等における言語活動、伝統や文化に関する教育、道徳教育、体験活動などを充実させることです。また、小学校高学年に外国語活動の時間が導入されました。さらに、社会の変化に応じて、情報教育、環境教育、キャリア教育、食育など、教科横断的な教育課題への取り組みも求められています。

国語科、算数科、社会科、理科などの教科では、授業時数が増加し、指導内容も追加されました。これに伴って

教科書のページ数が増え、教材が豊富になりました。

各学校では、こうした新しい教育課題を受けとめ、これまでも積極的に取り組んできたことと思います。すでに取り組みの手応えを感じ、成果が生み出されている場面もあるでしょう。しかし、教育活動が改善されていない状況も一部に見られます。これは、新教育課程の趣旨が十分理解されていないためではないかと思われれます。

例えば、教科書の内容が増加されたことによって教え込みの指導が先行していること、教科における言語活動が重視されているものの、それが目的化されていること、総合的な学習の時間の取り組みが形骸化していることなどをあげることができます。また、道徳教育の充実や学習評価の計画的な実施など、各学校での取り組みが遅れている課題もあります。

さらに、昨年3月11日に発生した東日本大震災などさまざまな自然災害を受けて、防災教育のあり方が各学校や地域の重要な課題としてクローズアップされています。これまでの取り組みを根本から見なおす必要があります。

このように、新教育課程の趣旨を生かすために、また社会の変化に応じて新しい課題に対応するために、いま各学校が取り組まなければならない課題はじつに多岐にわたっています。

これらのさまざまな教育課題に満遍なく取り組むことが大切です。しかしそのなかでも自分の学校の課題は何かを明らかにすることが大切です。これは「課題の明確化・自校化」を図ることです。子どもの実態や地域の実情、保護者の意向や教師の願いなどをもとに自校の課題を明確にします。

ここでは、新教育課程が提起している課題について、学校でのこれまでの取り組み状況にも触れながら改めて整理しました。これからの教育活動に生かしていただければと思います。

教科書の効果的な活用法

「教科書の内容が増え、1時間も無駄にできません。『ゆとりや遊び』が無くなってしまいました。わからないままの子どもが出てくるのではないかと心配しています。」「内容が増えたので、つい教え込みの授業になってしまいます。もう少し時間をじっくりかけて話し合ったり、考えさせたりしたいのですが、それができません。」

これらはいずれも算数科の授業に対



して言っているものです。算数科は授業時数が6年間で約16%増加したのに対して、教科書のページ数は平成17年度の使用本と比べて約25%も増えていますから、こうした声が出てくるのはある意味で当然でしょう。

理科の教科書では、平成17年本と比べて22.4%増、国語科は16.1%増になっています。社会科でも増加しています。いずれも教科書が分厚くなりました。ここで示した数字は、「各社全点合計ページの平均」（文部科学省調べ）です。

このことは教科書の教材がこれまでよりも豊かになったことを意味していますが、同時に教科書の活用方法を改めることの必要性を示唆しているものです。

教科書は学校教育法によって「使用しなければならない」と、教科書の使用義務が定められています。これまでわが国の学校では、教科書の単元や内容に沿って教えるという傾向が強く見られました。これは「教科書を教える」という活用方法です。これからもこうした考え方で教科書を活用すると、授業時間は足りなくなり、「教科書が終わらない」ことも予想されます。

これに対して「教科書で教える」という活用方法があります。これは「ある学習内容」を身につけさせるために、教科書の内容や資料などを教材（題材）として活用するものです。教科書を方法的、手段的に活用するものです。

「教科書で教える」という考え方に立って教科書を活用するとき、重要なことは次のことです。まず、学習指導要領をもとに指導のねらいや内容を確認し、それを踏まえて教科書の内容や教材の精選と重点化を行うことです。教科書の隅から隅まですべてを扱うという、従来の考え方から脱却する必要があります。

次に、発展的な学習として扱う内容や教材を明確にします。これらは必要に応じて指導することになります。学校での学習事項を復習させるとともに、家庭学習の習慣を確立するために教科書を活用することもできます。

教師の創意工夫を発揮し、教科書を弾力的に活用することが大切です。これによって、先に紹介した悩みや課題も解決できるようになるのではないのでしょうか。

言語活動・充実の目的は何か

いま「言語活動」をテーマに位置づけて校内研修（研究）に取り組んでいる学校が増えています。教育委員会からの指定や委嘱を受けている学校もあり、高い問題意識をもって全教科等を対象に取り組まれています。

授業において言語活動を充実させるとき、その中核として重要な役割を果たす教科は何といっても国語科です。国語科は「読む」「書く」「聞く」「話す」活動をととして言語に関する能力を育成する教科です。国語科の授業で言語活動を重視することによって、その成果を他の教科等で発揮させることができるようになります。

国語科を除く教科等において言語活動を充実させるとき、その目的を明確にしておかないと、その教科等の役割が曖昧になるおそれがあります。残念なことですが、言語活動が目的化された取り組みもすでに見られます。

言語には重要な役割がありますが、あくまでも表現したり伝達したりするためのひとつの手段にすぎません。音楽や映像や身体など言語によらない方法もあります。どのような手段を取り入れるかは、その教科やその場面によっておのずから決定されます。

同じようなことは言語活動についても言えます。言語活動はさまざまな学習活動のひとつです。ものづくりや生産活動などの体験活動、観察や実験、実習も重要です。それぞれの場面でのような学習活動を選択するのか。このことは教師の重要な裁量です。

「はじめに言語ありき」ではありません。「言語活動はオールマイティ」でもありません。何のための言語活動なのか。言語活動の目的を確認しておくことが大切です。国語科を除く教科等においては「言語活動の充実」のねらいを次の三点に集約できます。



まずは、それぞれの教科等の目標や内容をより効果的に身につけさせるためです。このことを曖昧にしたままに言語活動が展開されると、評価の対象が不明確になります。その教科の役割そのものが問われかねません。

次に、言語活動をとおして思考力、判断力、表現力などの能力をはぐくむことを目指しています。言語には知的な活動をうながし、他者とのかわりをつくる重要な役割があります。

さらに、言語活動によって自分の考えをしっかりとつなど自己を確立し、他者とのコミュニケーションを図ることができます。このことは、社会の一員としての自覚をもって、よりよい社会にかかわっていこうとする人間を育成することにつながるものです。

言語活動を目的化することなく、何のための言語活動なのかを改めて確認し、各教科等の特質を踏まえた言語活動を充実させたいものです。

「総合的な学習の時間」の活性化

「総合的な学習の時間」は平成14年度から完全実施され、すでにかかなりの年数が経っています。創設された当時はかなりの混乱や戸惑いも見られましたが、各学校での努力と実践の積み重ねによって、徐々に軌道に乗ってきたように思われます。

しかし一方で、教師による適切な指導が行われず、子ども任せになっている実践も見られます。教科の補習や学校行事の準備のために利用するなど、「総合的な学習の時間」の趣旨に合わない取り組みも見られます。

また、学級や学年の担任がすべての活動内容を決定するようになっているために、学校としての統一性や一体感に欠けている状況も見られます。全般的に見て、創設されたころの創意工夫や緊張感が薄れ、ややマンネリ化しているように見受けられます。

新学習指導要領では「総合的な学習の時間」について章を新たに設けて示されています。この時期に、自分の学級や学年はもとより、自校の「総合的な学習の時間」を総合的に点検してみてもどうでしょうか。

ここでは、学級担任の立場から総点検するポイントを紹介します。
・教師は子どもの主体性を尊重すると

ともに、子どもの学習状況を踏まえ適切に指導しているか。

・学校として設定されている「総合的な学習の時間」の目標を踏まえ、各学年の「目標や内容」を実現できるような教材や学習活動が工夫されているか。

・年間に設定されている複数の単元や学習活動が連続し、学習が発展的に展開されているか。

・評価の観点や評価規準を設定し、適切に評価するとともに、評価結果を指導に生かしているか。

・教科等の教材や学習成果、経験などとの相互関連を図った指導計画を作成し、意図的に指導されているか。

・「総合的な学習の時間」において、言語活動を充実させるための工夫が行われているか。

・教材や学習活動などのレベルで、道徳教育との関連を意識した指導がなされているか。

また、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、学校として策定されている「全体計画」（基本計画）の内容をリニューアルする必要もあります。

見なおしに当たっては、校長や副校長・教頭がリーダーシップをとり、「総合的な学習」主任が中心になって全校体制で取り組むことです。

「総合的な学習の時間」の取り組みでは、「ひと・もの・こと」の観点から地域とのかかわりが重視されています。そのため、地域住民は教科指導以上に活動の内容に注目しています。授業にかかわった人は特に高い関心と期待をもっています。学校が地域から信頼され、評価される機会でもあります。「総合的な学習の時間」の実践は「学校の顔」でもあります。特色ある教育活動としてさらに発展させたいものです。

学習評価一課題は何か

学習指導要領の改訂に伴って、児童指導要録が改善され、学習評価の考え方や新しい課題が示されました。「目標に準拠した評価」による観点別評価や評定が一層重視されたこと、学力を構成する要素に照らして評価の観点の一部見なおされたことなどが主な改訂のポイントです。

また、学習評価の目的は、成績をつ

けるためだけでなく、目標の実現状況を把握し、その結果を指導の改善に生かすためとしたことは注目されることです。指導の結果の面から、子どもの学力の水準を維持しようとするものだからです。学習評価は「成績をつける」ことよりも、子どもに「学力をつける」こと、教師の「授業を改善する」ことを目的に実施されるものです。

今回の改訂ではこれまでの学習評価のあり方や枠組みを維持しており、それほど大きな改訂でなかったからでしょうか。あるいは各学校が観点別評価の方法にかなり慣れてきたからでしょうか。これまでと比べると、学習評価に対する関心がそれほど高くないように思われます。

学習評価を意図的、計画的に実施するためには、観点ごとの評価規準を明確にした評価計画を作成する必要があります。ところが、これまでの評価計画や評価規準は細かくなりすぎていたことはないでしょうか。

例えば次のような具体的な指摘があります。

指導に当たって設定された目標と評価規準との関連性が曖昧で、目標に準拠した評価になっていないこと。観点別評価の結果が重視され、目標に準拠した評価になっていなかったこと。評価規準と評価基準、A基準・B基準・C基準の作成など、子どもの学習状況を判断するものさしが細かすぎて煩雑だったこと。観点ごとの総括評価や四観点をもとにした評定への手続きが機械的、形式的であったために、各観心の趣旨が生かされていないことなど。

そのために、これからは簡素で効率的な学習評価が求められます。「成績をつけることが主目的にならないような評価」や「評価のための授業」にならないようにするためには、例えば、評価の結果を指導に生かすことを主要な目的とする場面と、評価結果を記録に残すことを目的とする場面を区別して設定することも考えられます。

厳密に考えるほど、評価計画は細くなります。しかしそれでは長続きしません。「いつでも、どこでも、だれでも」できる評価にするためには、シンプルなものがベストです。時には、子どもや保護者との確かな信頼関係に立った、教師の観察や勘を重視することも必要です。

新しい教育課題にどう取り組むか

教科横断的な教育課題には、国際理解、環境、情報、福祉、健康などに関する教育があります。これまでも「総合的な学習の時間」や関連する教科等で行われてきました。こうした教育課題は社会の変化に応じて提起されてきたものです。今回の学習指導要領では、これらの教育課題の他に、食育、キャリア教育、金融教育、安全教育などが重視されています。

これらの教育課題のうち、食育については学習指導要領の総則に示されており、全教育活動を通じて推進することが求められています。特に重視される時間は、学校給食や体育科、家庭科、学級活動などです。食育推進のための「全体計画」や食育の視点を位置づけた各学年の「年間指導計画」を作成して指導することが課題になっています。栄養教諭や学校栄養職員などが配置されている学校や地域では、こうした先生方などと連携・協力しながら推進する必要があります。

各学校では、これまでも生活安全、交通安全、災害安全の観点から安全教育が行われてきました。各地で、地震や津波、豪雨による土砂崩れ、火山噴火による被害など、さまざまな大きな自然災害が発生しています。このことを受けて、防災教育が重要な課題としてクローズアップされてきました。

校務分掌に防災担当者を位置づけるなど、校内の推進体制を確立することも大切です。それぞれの地域で起こりうるあらゆる自然災害を想定し、さまざまな時間や場面における対応マニュアルの作成とそれにもとづく訓練を繰り返すことが重要になります。

東日本大震災の教訓を生かした、防災教育の取り組みが求められます。



教えて北先生

係の仕事をやらない子ども

Q. 学級では子どもたちに「一人一役」の仕事を決めています。ところが、Aさんは仕事を決めたときには熱心に行っていたのですが、いまではまったくしなくなってしまいました。その仕事は教室内の花瓶の水を替えたり、植木鉢に水をやったりする仕事です。これから、どのように指導するとよいのでしょうか。

A. なぜやらなくなったのか、原因を考えてみましょう。係を決めるとき、本人の意思を尊重したか、一方的に割り当てたか。係の決め方に問題はなかったのかです。その後、やる気を無くした何かがあったことも考えられます。やる気を無くした理由を本人に聞いてみるとよいでしょう。

人間は誰でもそうですが、自分の仕事が周囲の人のために役に立っていることを認識するとうれしいものです。みんなから感謝されると、つらいことでもやってよかったと思います。このような感情を自己有用感と言い、人が育つときのひとつの鉄則です。

「Aさんのお陰で、毎日美しい花が見られるね」とか「Aさんがかかさずに水をやったので、綺麗な花が咲いたよ」などと、Aさんの仕事を価値づけたり、Aさんの頑張りを称賛したりする言葉をかけるとよいでしょう。



教育の動向

キャリア教育に関する報告書

「キャリア教育」と聞くと、進路指導を連想し、中学校や高等学校での取り組みだと思われがちですが、小学校においても、キャリア教育を推進することが重要な課題になっています。

文部科学省の児童生徒課から、すでに『学校が社会と協働して一日も早くすべての児童生徒に充実したキャリア教育を行うために』という報告書が公表されています。これは、学校がキャリア教育を推進するとき外部人材活用のある方や方法について調査研究した結果を取りまとめたものです。

本報告書は「1章 なぜ『キャリア教育』が必要なのか」「2章 学校が社会と協働して『キャリア教育』を行うため学校や教育委員会は何をすべきなのか」「3章 どうすれば学校以外の人材と連携した『キャリア教育』が行われるようになるのか」などから構成されています。2章では、教育課程へのキャリア教育の位置づけ方、学校や教育委員会、大学の役割について述べられています。3章では、教育関係の機関と地域・社会や産業界が連携・協働していくために必要なことについて解説されています。

実践事例が盛り込まれていて、わかりやすい内容になっています。



コラム 北先生の授業力向上術

子どもウォッチング

子どもを理解するためには、さまざまな方法や手だてがありますが、子どもの表情や行動、態度など、教師による観察はそのひとつです。

授業中、子どもたちをよく観察していると、じつにさまざまな表情が目に入ってきます。首を横に振っている子ども、突然顔の表情を変えた子ども、顔に微笑みを浮かべた子どもなど、特徴的な表情には目が止まります。その場の雰囲気合点のいかない怪訝(げげん)な顔つきをする子どももいます。子ども一人一人の顔などの表情には、その時その時の自分の考えや心情や気持ちが表れるものです。

子どもたちの表情をつぶさに観察していると、どの子どもがどのようなことを考えているのか。およその内容や傾

向がわかるようになりますから、子どもウォッチングは楽しいものです。

わたくしは子どもの顔の表情を見ながら、「○○君、いま不思議な顔つきをしたね。いま考えていることをそのまま話してごらん」「○○さんはたぶんみんなと違うことを考えているよ。○○さんの意見をみんなで聞いてみよう」などと、教師の方から子どもを指名して発言を促しました。

教師の子どもを観察する力は、授業力の重要な要素です。子どもの表情をもとに教師が子どもを指名することは、指導案に表れない授業の裏ワザだと言えます。



INFORMATION

授業が変わった!
評価が変わった!



ぶんげいテストは今年度も4種類



株式会社文溪堂 <http://www.bunkei.co.jp>

「教育の小径」の全てのバックナンバーをインターネットでお読みいただけます!

ダウンロードして印刷も可能です。お知り合いの先生にもぜひお勧めください。
<http://www.bunkei.co.jp/2012/monthly.html>
または「ぶんげい 教育の小径」で検索。



企画・編集：ぶんげい教育研究所
発行：株式会社文溪堂
発行日：2012年4月1日